

# 反核医師の会

HANKAKU  
ISHI no KAI News

## ニュース

Physicians Against Nuclear War (PANW)  
核戦争に反対する医師の会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5  
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内  
電話 03(3375)5123 FAX 03(3375)1862  
e-mail: panw@doc-net.or.jp  
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

## 被爆80年 反核平和運動・被爆者支援・ 被爆医療の歴史を学び継承しよう！

### 第35回 反核医師のつどい in 東京(8/30、31)

184人が参加  
(オンラインを含め)

反核医師の会は、昨年8月30、31日に、東京都内で「第35回反核医師のつどいin東京」を開催した。メインテーマは「被爆80年 反核平和運動・被爆者支援・被爆医療の歴史を

### 2日間全体のまとめ

実行委員長 向山 新

広島・長崎に原爆が投下されて80年の節目の年である昨年の第35回反核医師のつどいin東京は、被爆80年、反核平和運動・被爆者支援・被爆医療の歴史を学び継承しようというテーマのもと開催された。今回は代表



会場いっぱいの参加者

学び継承しよう！」。シンポジウム、学習講演、斉藤とも子さんによる記念講演、若手による特別企画などが行われた。概要を報告する。

年齢が、一気に若返ったという声があちこちから聞こえてきた。

この間の若い皆さんの活躍に、多くの会員が勇気をもらって反核医師の会の活動も活発になっている。今後も各地での若い皆さんの活躍を応援していきたいと思う。また、2日目のセッションのように、医療者以外のかたがたとの連携が広がっていることも今後の運動にとって有意義であると思う。

### 1日目 シンポジウムと学習講演

#### 第一部 シンポジウム ―被爆80年、被爆者運動・被爆者医療の歴史を継承する―

1日目の最初のプログラムは、シンポジウム「被爆80年、被爆者運動、被爆者医療の歴史を継承する」だった。日本被団協の田中照巳さんと、被爆者医療に長年取り組んでこられた齋藤紀先生と、いっぽうプロジェクトの2名の若者のディスカッションだった。

田中さんは、被団協が結成されるまでの、占領下の7年、その後も日本政府が何もしてくれなかった3年、被爆者として声を上げ



田中照巳さん(左)と齋藤紀先生(右)

運動の進め方を考えて、自分の課題として核兵器廃絶の運動を行ってほしいという思いをお話しいただいた。

齋藤紀先生は、非戦・非核・包摂というタイトルでお話しいただいた。なぜ原爆投下が歴史的事実になったか、そこには領土奪取、人種差別排外主義による大量殺戮の日常化があった。二つの世界大戦で数千万の人々が死んだ

というその果てに、原爆投下があった。ガザのジェノサイドに触れ、核兵器廃絶の運動には高い倫理性が不可欠で、ジェノサイドを止め止められないで核廃絶は成し遂げられない。被団協のノーベル賞受賞の意義はここにあると述べられた。

また、原爆投下の非人道性について、爆風と熱線による一撃的な破壊力が凄まじいこと、放射線による継続性、永続性にあると示された。放射線による被害は、あの瞬間に被ばくしたならば止めることは絶対できない事も強調された。

ディスカッションの中で、被爆者との関係が話題となった。若手医師の河野絵理子先生からは、被爆者の方に限らず、いろいろな苦しい思いをされている方を、田中さんと齋藤さんのお友達みたいな関係で、医者として関わりたいという思いを話された。

田中照巳さん(左)と齋藤紀先生(右)

日本被団協が2024年にノーベル平和賞を受賞したが、一年以上たった今もその感動は薄れていない。被団協こそが、伝統と権威あるノーベル平和賞を受賞するにふさわしいということに異論はないだろう。海の内こうでは、あのトランプ氏が同じ賞を欲しがっているという。日本の新首相も「推薦する」とトランプ氏に伝えたという。これがただの漫才ならば、くだらない、と言って無視することも可能だが、両国のトップ同士の会話なのでそうもいかない。何故トランプ氏はノーベル平和賞を欲しがらるのだろうか。すべては自分のものだと思っているから。お金は充分あるから今度は名誉が欲しくなった。ノーベル平和賞は金儲けになる。いずれもありそうな話だが、どうも説得力に欠ける。核兵器廃絶運動や平和運動をよく思わないトランプ氏だが、彼のお得意の大統領令を使っても、被団協、ICANN、IPPNWからノーベル平和賞を剥奪することはできない。だとしたら、ノーベル平和賞を最も価値のない意味のないものにするためには、自分自身が受賞することだと考えたというのはどうだろうか。発想が飛躍し過ぎていると思われるかもしれないが、これなら私は十分に納得できる。こんなくだらない漫才に世界中がNoということをお願いしている。(Y)



(1面のつづき)

して権威を持った人ではなくて、同じ市民として活動していくことを大事にしたいという感想があった。斎藤先生からも、被爆者を偶像化してはいけない。偶像にしてしまった瞬間に何かがちよつと違ってくるのではないかと。被爆者もやはり広島長崎で普通の市民として市井の人として生活をしていたわけで我々と共通である市民の1人としての喜怒哀楽悲しみと共通の部分があるから我々は戦えるという発言もあった。

また、齋藤先生が「挫折したことはないか」という質問に対して、挫折はないんです、被爆者が挫折しませんから。だから支える側に挫折はないと



左からコーディネーターの向山先生、医学生  
の松久凌大さん、青年医師の河野絵理子先生

いう回答に、医学生の松久凌大さんが力強い言葉をいただいて、偉大な先輩方の歴史の上に立てると心強く思うというやりとりが印象的であった。継承の問題だけで無

## 第2部 「原爆裁判」を現代に活かす

一日目の最後は、『核兵器も戦争もない世界』を創るために」というテーマで、日本反核法律家協会会長の大久保賢一弁護士に教育講演をお願いした。

ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのガザ地区のジェノサイドなどで軍事力の行使と核兵器使用の威嚇が行われており、核戦争の危機が迫

っている。日本においても、2022年の国家安全保障戦略などで米国の核の傘の下で防衛力の抜本的な強化が行われ、参政党などを中心に日本の核武装を主張する政党も出現している。このような世界が再び核戦争に向かう危機感の中で、ノーベル平和委員会が日本被団協に2024年のノーベル平和賞を授与した。この

授与式で被団協の田中熙巳代表委員が「人類が核兵器で自滅することがないように、核兵器も戦争もない世界の実現に向けて頑張ろう」との訴えは、全世界の人々に共感を広げている。  
アメリカの原爆投下が国際法上違法であると認めさせる闘いにおいて、原爆裁判の果たした役割は大きい。原爆裁判とは、1955年下田氏らヒバクシャ5名が、米国の原爆投下は違法であり、講和条約によって対米請求権を放棄した日本政府に

## 2日目 肥田舜太郎との交流 ～斎藤とも子氏の講演

記念講演の斎藤とも子さん



2日目の記念講演には、俳優の斎藤とも子さんをお迎えし、「ヒロシマからフクシマ、そして未来へ」肥田舜太郎先生の教えを胸に」と題してお話をいただいた。斎藤さんは俳優としての道を歩きながらも、どう生きていったらいいかわからず人生に迷う経験をされ、子育てをしながら大検をへて東洋大学社会学部社会福祉学科に入学し修士課程まで学ばれた経歴を持つ。

ちょうど大学入学の時期に、井上ひさし氏の「父と暮らせば」という芝居で、罪の意識を持ちながらも亡くなった人の分ま

身の心が救われる体験ともなった。これが被爆者との最初の出会いであった。

大学では、被爆者の生活史を卒論にすることに決めた。被爆前の人生と、その後被爆者がどうやって生き抜いてきたのかを

もっと知れたかった。そして修士論文では、胎内被爆の問題を学びたいと考え、鎌仲ひとみ氏の紹介で、肥田舜太郎医師に直接会って相談することになった。その時の肥田医師の対応は、「自分の修士論文のために被爆者

及び内閣の職責であり、この訴訟を見るにつけ、政治の貧困を嘆かずにはおられないと結んだ。この判決やその後のヒバクシャたちの闘いによって、1995年被爆者援護法が制定された。ただし、この援護法は、核兵器の廃絶を「究極的」として永遠の彼方に追いや

斎藤さんの思いが肥田医師にも伝わり、いろいろな方を紹介されることになった。

さらに肥田医師からは、「きれいごとではなく平和とは覚悟がいること」「戦争で大切な家族が殺されたとしてもやり

返さないこと、それくらい覚悟が必要」と言われた。そのとき直感的に、この先生についていきたいと感じた。肥田医師の言葉に、そう思える自信はないと言いつつ、斎藤さんは今も自分自身に問い続けている。また、被爆者でもあり臨床医でもある肥田医師の姿勢についても、被爆者の話をじっくりと聞き、原爆がら病の被爆者に対して、「決して怠け者ではない、自分を責めることはない、原爆のせいだ」と語る姿に感銘を受けたという。

修士論文で取り上げた原爆小頭症の子ども達

福島第一原発事故の被害についても触れられ、特に福島原発ひろしま訴訟原告の渡部美和氏の意見陳述について紹介し朗読された。自身被爆3世であり胎内被爆者である叔父をもつ渡部氏が、原発事故により福島での大切な生活が破壊され苦しんできたこと、社会は既に事故のことを忘れ、何も教訓として残っていないこと、原発という巨大な暴力と戦い、裁判をとおして事実を残したい、このようなことを二度と繰り返してはならないとの訴えを紹介された。

斎藤さんの被爆者との出会い、肥田舜太郎医師の導き、きのこ会との関わり、その後のご自身の活動について大変熱く語られた。

講演する大久保賢一弁護士



都市に対する原爆の投下は、当時の国際法に違反し、さらに、原子爆弾がもたらす苦痛は、毒ガス以上のものであり、非戦闘員に不必要な苦痛を与えてはいけないという戦争法の基本原則に違反しているとしたが、原告の請求は棄却した。その理由は、国際法上の権利を持つのは、個別の条約で認め

められていない限り国家であり、被爆者に国際法上の請求権はないということであった。さらに日本国政府の責任においても、原告に元々権利はないのであるから、対日講和条約によって、原告が失うものはないと判決した。

そのように判決したが、戦争災害に対しては当然結果責任に基づく国家補償の問題が生じ、国が十分な救済策をとるべきことは多言を要しない。しかし、それは裁判所の責務ではなく、国会

核兵器は国際法上違法であるという判断は、その後、1996年の国際司法裁判所の「核兵器の威嚇または使用は一般的に国際法に違反する」という勧告的意見に引き継がれた。そして、それが2017年7月7日の国連での核兵器禁止条約の採択となり、現在、署名に、「原爆裁判」をルーツにもつ核兵器禁止条約を普遍化し、核兵器も戦争もない世界を一刻も早く実現しようと結ばれて、講演を終わられた。

代表世話人 原 和人  
世話人 雪田慎一



## いっぽプロジェクト企画

### いっぽいっぽ考える、

### 私たちの平和と政治

いっぽプロジェクト 荒木さくら



2025年3月に参加した第3回核兵器禁止条約締結国会議に、日本から若い世代の参加者が多く、各団体がそれぞれのアプローチから核兵器禁止条約を前に進めようと、意欲的に参加している姿がとても印象的だった。

2025年3月に参加した第3回核兵器禁止条約締結国会議に、日本から若い世代の参加者が多く、各団体がそれぞれのアプローチから核兵器禁止条約を前に進めようと、意欲的に参加している姿がとても印象的だった。

他団体とのつながりを広げつつ、締結国会議で感じた核兵器禁止条約の盛り上がりをつづいていくから、今回の企画が始まった。ゲストは締結国会議に参加されていた、カクワカ広島（核政策を

知りたい広島若者有権者の会）の田中美穂さん、Geneeの徳田悠希さん、元NONUKES TOKYOの本間のどかさんをお呼びして、いっぽメンバーとの座談会企画（以下、いっぽ企画）を行った。

被爆者が減り、戦争を経験していない世代だけになる将来が近づいているなか、今回のいっぽのテーマは「継承」となった。いっぽ企画の中でも

これまで被爆者が先頭に立ってきた反核運動をどう引き継いでいくのかが話し合われた。私自身は前日の企画で被団協の田中熙巳さんの「次世代の皆さんは自分たちなりの運動をつくってほしい」というメッセージを思い起こしながら、皆さんの話を聞いていた。ゲストの皆さんからは、SNSの発信の工夫や地域に密着した活動を継続的にやっていくこと、国際的なつながりを一回で終わらずに定期的な交流をもつことなど、各団体の活動で大事にしていることが出され

た。仕事をしながら活動が続いていくことの難しさについては共感の声が集まり、気軽に参加できる活動を模索する必要性も共有された。被爆者の平和への思いを、自分事として受けとってもらえるかたちにして、多くの人へと広げていくことが求められているのだから、改めて感じた。

締結国会議では、核兵器禁止条約をどう進めていくかが真剣に話し合われ、核被害者国際基金など具体的な行動計画が進行しているのを肌で感じることができた。

その一方で、帰国後の

## 核廃絶 Café

いっぽプロジェクト 稲原 真一



8月31日（日）の午後、閉会からそのままでの流れで会場となった平和と労働センターの8階会議室に参加者19人が集まり、約2時間の交流を行った。参加者は若手医療者や医学生が対象だったが、いっぽ本番の座談会「いっぽいっぽ考える、私たちの平和と政治」（別記事参照）に登壇いただいた

ゲストの田中美穂さん、徳田悠希さん、本間のどかさんにも加わっていた。前日の夜はメンバーで集まって設営し、飲み物やお菓子などを購入。受付や会計、司会なども分担して、それぞれのメンバーが役割を持って関わった。当日、参加者は3つのグループに分かれ、用意していたお弁当を食

べながら交流した。会場では自分の呼ばれた名前を名札に書いて呼び合うことを確認し、職種や立場にかかわらずフラットな場づくりを目指した。全国からの参加者が集まり、初対面の参加者も多かったが、交流ではテーマを決めずにいっぽのオプション企画として「核廃絶Café」を開催した。いっぽ2日目の

感想や、今の政治や社会医療についてなどさまざまな話題で盛り上がった。私の参加したグループでは、学生や社会人として活動している中で、身近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言う人たちと、

どう対話することができるとのかとなど、もやもやが出された。ゲストの徳田さんからは、メディアから若者や女性という属性で注目される一方、逆にジェンダーなどの主張をしたとたんに取り上げられなくなる経験から、メディアとのかかわり方にも話題が広がった。

別のグループでの議論も一部紹介する。「運動の継承は被爆地でも課題だが、PANWの今回の企画は本場の継承だと感じた」「被爆者医療の継承という

けど、被爆者健診ってどうやっているのか？」運動の中での権威勾配をなくすにはどうしたらいいか」「診療報酬が低すぎる」「メガソーラーの環境破壊が問題」などなど、本当にたくさん話題や思いが共有された。

終了後は「次のいっぽ」をテーマに、参加者それぞれが考える目標や行動を付箋に書き出し、メンバーのデザインした台紙に張り付けてまとめた。まだまだ活動を始めたばかりのいっぽプロジェクトだが、こうした交流や思いを大切に、これからも次のいっぽを踏み出していきたいと思える企画になった。

藤ともさんがどのような姿勢、思いで被爆者の方と共に歩んできたのか知る事ができた。斎藤さんの言葉は正に自らの経験を通じて発せられた言葉であり、深く心に刻まれた。これこそ、真の継承の姿と感じた。

いっぽの終了後はABC for Peace（いっぽプロジェクト）主催の「核廃絶Café」に参加し、同世代の仲間とわがしの次のいっぽを自分

がやりたいアクションについて語り合った。若者企画に登壇された田中さん、徳田さん、本間さんも参加してくれ、会

場は大いに盛り上がり、た。「初日の講演を受けて」原爆裁判全資料を「読む」「自分や病院の係っている銀行にDBOB（Don't Bank On the Bomb）するよう働きかけろ」「被爆者検診に参加する」「職場の人と友人と対話する」などなど…本当にたくさん

の小さな会だが、私なりにいっぽいっぽ進んでいきたいと思う。



た。仕事をしながら活動が続いていくことの難しさについては共感の声が集まり、気軽に参加できる活動を模索する必要性も共有された。被爆者の平和への思いを、自分事として受けとってもらえるかたちにして、多くの人へと広げていくことが求められているのだから、改めて感じた。

締結国会議では、核兵器禁止条約をどう進めていくかが真剣に話し合われ、核被害者国際基金など具体的な行動計画が進行しているのを肌で感じることができた。

その一方で、帰国後の

感想や、今の政治や社会医療についてなどさまざまな話題で盛り上がった。私の参加したグループでは、学生や社会人として活動している中で、身近な人と平和や核廃絶について話すことの難しさや、平和のために軍事力が必要と言う人たちと、

どう対話することができるとのかとなど、もやもやが出された。ゲストの徳田さんからは、メディアから若者や女性という属性で注目される一方、逆にジェンダーなどの主張をしたとたんに取り上げられなくなる経験から、メディアとのかかわり方にも話題が広がった。

終了後は「次のいっぽ」をテーマに、参加者それぞれが考える目標や行動を付箋に書き出し、メンバーのデザインした台紙に張り付けてまとめた。まだまだ活動を始めたばかりのいっぽプロジェクトだが、こうした交流や思いを大切に、これからも次のいっぽを踏み出していきたいと思える企画になった。

藤ともさんがどのような姿勢、思いで被爆者の方と共に歩んできたのか知る事ができた。斎藤さんの言葉は正に自らの経験を通じて発せられた言葉であり、深く心に刻まれた。これこそ、真の継承の姿と感じた。

いっぽの終了後はABC for Peace（いっぽプロジェクト）主催の「核廃絶Café」に参加し、同世代の仲間とわがしの次のいっぽを自分

がやりたいアクションについて語り合った。若者企画に登壇された田中さん、徳田さん、本間さんも参加してくれ、会

## 反核医師のつづいin東京に

### 参加して

いっぽプロジェクト 山梨 窪田 由和子



まず印象に残ったのは初日のシンポジウム「戦後80年、被爆者運動・被爆医療を継承する」にて日本被団協代表委員の田中熙巳さんが言われた「ただ被爆者の言葉をそ

っくりそのまま繰り返すだけでは継承ではない」との言葉だ。継承する側が自分の経験や思いとも重ね合わせて発信しないと真の継承とは言えないし、ならないのだと感じ、背筋が伸びる思いだった。

続く二日目「ヒロシマからフクシマ、そして未来へ」肥田舜太郎先生の教える胸に」では、齊

藤ともさんがどのような姿勢、思いで被爆者の方と共に歩んできたのか知る事ができた。斎藤さんの言葉は正に自らの経験を通じて発せられた言葉であり、深く心に刻まれた。これこそ、真の継承の姿と感じた。

いっぽの終了後はABC for Peace（いっぽプロジェクト）主催の「核廃絶Café」に参加し、同世代の仲間とわがしの次のいっぽを自分



# 第24回 核戦争防止国際医師会議 (IPPNW) 世界大会inナガサキ 開催 352人が参加

10/2~4



IPPNW 世界大会 in 長崎であいさつする田中照巳  
日本被団協代表委員

## 大会の概要

反核医師の会は、昨年10月2〜4日、長崎市内で開催された「第24回核戦争防止国際医師会議IPPNW inナガサキ」に参加した。メインテーマは「核なき世界」長崎を最後の被爆地に」

38の国と地域から352人が参加した。反核医師の会 (PANW) からは40数人が参加した。

が参加した。

すべてを紹介することはできないが、印象に残った一つは被団協の田中照巳さんのお話であった。最後に「被爆者の平均年齢は86歳を超え、話せる機会は長くはない。次の世代への運動を含めた継承が課題。IPPNWが成立している。これをさらに普遍化することが急務である。IPPNW

参加の皆さんが専門的な立場からぜひ健闘をお願いしたい。」と若い世代を含めた参加者へ投げかけられた。

また私が知らなかっただけでも知らないが、アメリカで原爆のためにウラン採掘がおこなわれ、原住民居住地に2万もの廃坑と廃精錬所が放置され、原住民に深刻な放射線被害が出ているとの報告があった。核実験によるいわゆる「風下」の被害はそれなりに知っているつもりであったが、これには驚いた。原住民などが被害を受け、放置されるという、まさに差別と搾取が行われており、今も続いているのだ。

反核医師の会は黒い雨の問題で分科会を持つことができ、ジャーナリストの小山美沙さんが歯科医師、広島県を青木克明先生が、長崎の現状は高辻俊宏長崎大学名誉教授と七條和子長崎大学研究員、本田孝也先生が報告され、最後に長崎の被爆体験者岩永千代子さんが報告された。このワークショップでは、PPや説明内容が印刷、配布され、後から再度確認することができ、私としては非常に良かったと思う。それにしても同じ被爆地で広島ではいわゆる「黒い雨」(放射線降下物)による影響が裁判で認められたのに、長崎で

は認められないという、理解に苦しむ事態になっていることを改めて理解できた。

別のワークショップでは、反核医師の会からD BOBの発言ができた。黒い雨と重なり、私は参加できなかった。D BOBは初日の夕方駅前まで街頭宣伝行動が行われ、私も参加した。半分以上の方がチラシを受け取ってくれ、しっかり配布することができた。長崎テレビが取材して翌日の昼のニュースで放映された。私がチラシを配っていたところもしつかり映っていた。

代表世話人 中川武夫

岩永千代子氏が自らの被爆体験と内部被曝の恐怖について語り、聴衆から強い関心が寄せられた。被爆体験者とは、長崎の原爆投下時に設定された被爆地域の外で被爆した住民を指す。広島では2022年に被爆者認定基準が変更され、2024年4月より2025年10月までに黒い雨の雨域の住民、約8,000人が新たに「被爆者」と認定されたが、長崎では被爆地域の外の住民で新たに認定された人はいない。長崎では、被爆地域外の住民への健康影響を放射線ではなく精神的影響によるものとし、医療費補助を受けられる「被爆地域外では黒い雨は降らなかった」と主張している。

なかつたと主張しているが、ABCの調査や1999年、2024年の調査により、被爆地域の外でも雨が降ったという証言や記録が存在することが示されている。さらに、雨の証言地域とマンハッタン調査団の残留放射線検出地点が一致しており、長崎でも広島と同様に雨が降ったことが証明されたと結論付けている。

## 「黒い雨」問題のワークショップ 反核医師の会・長崎県保険医協会共催

本田 孝也



左から、青木克明先生、高辻俊宏先生、  
本田孝也先生

IPPNW世界大会長崎大会のワークショップ「広島・長崎への原爆投下後の黒い雨」は10月4日PANW主催、長崎県保険医協会共催で開催された。

ワークショップは「黒い雨」訴訟の著書でも知られる小山美沙氏の司会、進行で進められた。広島からは青木克明医師が黒い雨について、長崎からは本田孝也医師が被爆体験者問題と長崎の黒い雨について、

高辻俊宏長崎大学名誉教授は米国マンハッタン調査団及び理化学研究所による長崎原爆の残留放射線測定結果と放射性微粒子の人体影響について報告した。続けて七條和子長崎大学研究員より被爆者の体内に証明されたプルトニウム微粒子について追加発言があった。フロアからは被爆体験者の

核戦争防止国際医師会議世界大会が10月2日〜4日に長崎市で開催された。

ワークショップ「広島・黒い雨被爆者」と長崎の被爆体験者」で広島の報告をした。

## 広島・「黒い雨」被爆者についての報告

青木 克明

被爆直後に黒い雨が広島に降った。中央気象台の指示で広島管区気象台が調査をして大雨地域、小雨地域の線引きをして報告したが、プレスコードで没収され、1953年に文部省が公表した。まとめ役の名をとって「宇田雨域」と呼ばれている。

1976年に長崎では爆心7kmにかかる地域が健康診断特例区域となり健康管理手当て対象の11疾患を発症した場合には3号被爆者に認定される事

1987年には気象学者の増田善信氏が住民とともに2000件以上の調査をして降雨域は宇田大雨区域の8倍だったと発表して「増田雨域」と呼ばれている。

2010年には広島県・市が調査して広島大学大瀧教授の解析では宇田

【5面へ続く】



【4面から続き】

大雨区域の6倍となり「大瀧雨域」と呼ばれている。国に拡大を求めたが「科学的根拠がない」として却下された。

黒い雨被爆者たちは2015年11月に広島地裁に提訴して勝訴した。2021年7月に広島高裁も原告は黒い雨を浴びており被爆者に該当するとの全員勝訴の判決を出して確定した。

2022年からは3号被爆者（原爆放射線の影響を受けるような事情にあった方）に「広島「黒い雨」被爆者訴訟の『原告』と同じような事情にあったと認められる方」が加えられ2025年9月末までに全国で7265人が認定された。長崎でも援護の拡大が期待されたが、国は「広島で黒い雨に遭ったこと」を要

件としているため、長崎県、市とも2人で熊本県と同じである。

国は高裁判決に反して降雨域を「大瀧雨域」に限定し、健康管理手当対象の11疾患で治療中であることを要件としたた

め、広島県・市では2022年度に184人が申請を却下された。

2023年4月に23人が広島地裁に提訴して第2次訴訟を起こし原告は84人に増えている。長崎では2007年か

ら爆心12km以内で原爆に遭った「被爆体験者」が「被爆者」と認められることを求めて提訴し2017年に最高裁で敗訴したが、諦めない44人が再度提訴して福岡高裁でたかっている。

「広島黒い雨訴訟」も「長崎被爆体験者訴訟」も被爆の実相を過小評価しようとする国の施策とのたたかいであり、核兵器の廃絶と世界平和のためにも2つの訴訟の勝訴をかちとろうと訴えた。

た平和運動の原点を肌で感じ、学んだ。

長崎大学医学部資料館では、三根先生（長崎大

学原爆後障害医療研究所）の案内で、被爆当時の医学部の状況、被爆後の医療従事者の奮闘、そして人体への影響を詳細に学んだ。特に映像による被害の再現は衝撃的であり、核兵器がもたらす「治療できない被害」を実感し、医療従事者としての責任と現実を深く認識した。

その後、山王神社のクスノキや浦上天主堂などを訪れ、最後には被災協事務所で被爆者の方々と直接交流する貴重な機会をいただいた。被爆者の方々からは、若い世代へのエールと共に英語版の

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

が、本場に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶を

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

が、本場に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶を

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

が、本場に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶を

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

IPPNW世界大会に参加した医学生の感想

高知大学 2年 吉田 光里



と平和の実現を目指している現場を目の当たりにし、その力強さに胸を打たれた。

長崎でのフィードバックでは、原爆医学資料展示室や浦上天主堂、如己堂、平和公園などを訪れた。実際に被爆遺構を目にし、当時の惨状を聞く中で、平和は決して当たり前ではないと痛感した。被団協の方から「科学は被爆者を傷つけたが、今はその科学の力で生かされている」という言葉をいただいた

も国も超えた一体感に胸が熱くなった。OBの方の「大学を卒業したら、授業のノートは本棚にしまってもいいが、IPPNWの資料はいつでも見られる場所に置いておけ」という言葉も印象に残っている。活動の記録や学びを紡ぎ続け行動につなげることが、私たちにできる平和への一歩だと感じた。世界中の同志と出会い、被爆地で過ごしたこの経験を糧に、これからも医学生として平和のためにできることを探していきたいと思う。

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

が、本場に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶を

IPPNWの国際会議に参加し、私が出席したのは前日にあった若手有志主催の長崎でのフィードバックとStudent Congressのみだった

が、本場に濃く充実した一週間を過ごした。医師や医学生が国際的な動きを生み出し、核兵器廃絶を

信州大学 3年 清水 克樹



かということである。被爆者を表す「ヒバクシャ」という言葉が世界で通用する共通語であることすら知ら

ラン探掘という重大な環境・健康被害が横たわっているという点である。ウズベキスタンやアメリカ南部などでは、ウラン探掘の過程で土壌汚染や放射線被曝が深刻化し、住民たちが長年にわたり健康被害に苦しめられている。私は、被爆者とは日本の広島・長崎に限られるものだと無意識のうちに考えていたが、実際には世界中に「知られざる被爆者」が存在し、核の影響は今この瞬間も続いている。こうした現

実を知ることができたのは、私にとって非常に大きな学びであった。また、会議では核兵器がもたらすリスクについて多面から議論が行われた。AIやサイバー技術の発展により誤作動の危険性が高まり、核抑止がむしろ不安定化を招く可能性があること。核兵器が「第一攻撃能力」や「報復能力」などの概念を通して軍拡を促し、偶発的な使用の危険を増大



「黒い雨」ワークショップの様子



この度、PANWの皆様からの多大なご支援により、2023年ケニア大会に続いて今回の長崎大会に参加することができた。心より感謝申し上げます。

平和への道筋をつなぐバイクツアー

会議に先立ち、9カ国21名が参加し、9月21日から28日まで広島から長崎への542kmを走破するバイクツアーを実施した。核廃絶への強い思いを胸に、8日間という物理的な旅路を共にすることで、参加者同士の文化



被災協の皆さんと

大会開始前には、世界からの参加者を迎える立場として、私たちPANWの若手でフィードバック（FW）を企画・実施した。国内外から計22名が参加し、被爆の地を巡ることで、核兵器がもたらす不可逆的な悲劇と、そこから立ち上がった

連帯を力に変え、PANWが果たすべき役割

学生会議や本大会を通じて濃密な学びや活発な

今回のIPPNW世界大会を通して、厳しい情勢の中でも世界で活動する人々と連帯し、希望の光を見出すことができた。PANWの活動は国際的にも非常に価値のあるものであり、今回の経験を活かし、若い世代でも活動・発信を力強く進めていく。そして国際社会の中でPANWの役割と価値をさらに発揮していく決意だ。



## 【5面から続き】

させていること。こうした話を専門家から直接聞くことで、核抑止という考え方がいかに脆弱で危険なものであるかを深く理解した。

医療者を志す私にとって、最も印象的だったのは「医療者が果たすべき役割」である。核兵器は一度でも使用されれば、人類が持ついかなる医療体制でも対応不可能な破壊をもたらす。だからこそ医療者は、科学的根拠

に基づいて核の非人道性を社会に伝える役割を担っている。特に日本は唯一の被爆国であり、広島と長崎の記録と記憶を世界に伝えることは、私たち日本人に特に求められた使命だと感じた。

一方で、会議に参加して痛感した自身の課題もある。それは英語力である。日常会話であれば問題なくコミュニケーションが取れるが、専門的な議論になると理解が追いつかず、悔しさを覚える場面が多かった。核廃絶

というテーマは国際協働なしには前に進まない。そしてその協働を可能にするのは、国境を越えて意思を共有するための言語、つまり英語である。核問題への知識を深めることと同じくらい、英語というツールを磨くことが自分にとって必須なのだと感じた。

今回の国際会議は、核問題を「遠い世界の問題」ではなく「自分事」として捉えるきっかけとなった。世界には核によって苦しむ人々が今も存在

し、核抑止という考え方が新たなリスクを生み続けている。医療者を目標とする者として、そして日本人として、核の非人道性を正しく伝え、世界の仲間と連帯しながら核なき未来に向けて行動していきたいと強く感じた。今回得た学びを出発点に、知識も英語もさらに深め、次に国際会議へ参加するときには、より主体的に議論に加われるようになりたい。

自分がISRを卒業してからもう20年の歳月が経ってしまった、と微笑みながら、当時は無謀と思っていたその企画が今では伝統になっていることに触れ、「自転車競技をやったことがある人なら分かるが、レースというのは常に一位を走り続ける必要はない。先頭を走る選手は、みな次番手以降のための風除けとなり、しかるべき時に、後続にその座を譲る。そうやって、より遠くを目指すのだ」。そして彼は、どうかこれまでの活動をPCのデスクトップフォルダにしまい込まないでくれ、と続けた。

「経験を積んだ医師がもう必要のないものとして医学書や解剖学の教科書を本棚にしまいこんでしまつように、あるいは後から整理しようとたくさん資料をデスクトップのフォルダに雑多にまとめるように、自由時間のあつた学生の時の活動を一度でも本棚やフォルダにしまい込んでしまつと、診療業務やキャリア、プライベートに忙殺される医師生活の中では、その活動を取り戻せなくなつてしまつ」と結んだ。

これまで学生会の学生として様々な経験をさせてもらった。医学生最後の年となった今年度は、恐縮ながらも学生会代表という立場を任せ、ニューヨークへと派遣もして頂いた。アイデンティティともいえるこうした医学生生活が、いま音もなく終わろうとしていることに寂寥の思いを禁じ得ないが、これも後続の学生たちにつながっているのだと信じて、駆け抜けたレースの役目を降りようと思う。そして、この6年間の活動をしまいこむことなく、私なりのいっぽを踏み出し続けたいと願う。

最後に、本大会参加ならびにFW開催にあたって、ご支援頂いた反核医師の会の皆様に深く感謝申し上げます。

長崎大学 6年 森 爽



ことがはじまりだった。

非公式かつ直前の告知にも関わらず、20名を超す国際学生から申し込みがあった。

精悍な横顔を見るにつけ、改めてこの長崎の地でフィールドワークをやつて良かったなど実感することができた。誌面の関係で具体的には書ききれないところもあるのですが、いつかまたお話ができる機会があればと思う。

二つ目は新旧ISRのinternational students representative)によるトークセッションでのエピソードだ。本大会をもつて、現IPPNW国際学生代表は任期を終了し、次期学生代表へとそのバトンを渡す。

新旧ISRたちがざつとくぼらんにディスカッションをするなか、学生バイクツアー企画の創始者であるドイツ人医師アレックスの言葉は、今の私の胸を打つものだった。

一つ目は世界の医学生たちとフィールドワークを開催したことだ。13年ぶりとなる国内開催にあわせ、学生会でも何かできないか、と話が出た

本世界大会には学生会から4名の学生が参加した。忙しい学業や実習の合間を縫って長崎へと足を運んでくれたことを心から嬉しく思う。大会での詳細な内容は他の方々へと譲るとして、ここでは印象に残っている出来事を紹介したいと思う。

一つ目は世界の医学生たちとフィールドワークを見入るその眼差しと真剣さを見るにつけ、自分たちのたたかひを引き継いでくれと訴える被爆者から目を逸らさない彼らの

二つ目は新旧ISRのinternational students representative)によるトークセッションでのエピソードだ。本大会をもつて、現IPPNW国際学生代表は任期を終了し、次期学生代表へとそのバトンを渡す。

新旧ISRたちがざつとくぼらんにディスカッションをするなか、学生バイクツアー企画の創始者であるドイツ人医師アレックスの言葉は、今の私の胸を打つものだった。

## 「Don't Bank on the Bomb」キャンペーン

IPPNW世界大会で交流  
日本の活動に会場から拍手

日本でのとりくみについて報告する松井氏（右端）



DBOBブースで海外参加者と交流する反核医師の会のメンバー



20人を超える医師・歯科医師が参加した長崎駅前の街頭宣伝

反核医師の会は「Don't Bank on the Bomb」(核兵器にお金を貸すな、DBOB)キャンペーンの普及と国際的な連帯の強化を目的に、10月2〜4日に長崎で開催された第24回核戦争防止国際医師会議(IPPNW)世界大会に参加した。

会場ではDBOBの活動を紹介するブースを設置し、核兵器関連企業への投資の実態を伝えるパンフレットを海外参加者に配布。平和へのメッセージを書いてもらう取り組みを通じて約90人と交流した。ブースには、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)のメリッサ・パーク事務局長、同初代代表のティルマン・ラフ氏、同国際運営委員の川崎哲氏、IPPNW共同代表のカルロス・ウマニャ氏らが訪れ、世界の核廃絶運動を牽引する人々と直接つながる貴重な機会となった。4日に開かれたDBOBが送られた。

2日夜には、長崎駅前街頭宣伝を実施し、20人を超える医師・歯科医師らが参加。韓国の医師とも連携し、「核兵器製造企業への投資をやめよう」と力強く訴えた。この行動はテレビ長崎、長崎国際テレビ、共同通信が取材し、翌日のテレビニュースやYahoo!ニュースでも報道された。

また3日には、「核兵器をなくす日本キャンペーン」のYouTube配信企画に松井氏が出演し、IPPNW世界大会の様子や医師が核兵器廃絶運動に取り組む意義、DBOBキャンペーンについて語った。一連の活動を通じて、DBOBキャンペーンへの共感が国内外で広がり、核廃絶に向けた市民と専門職の国際的連帯をいっそう深める契機となった。



# 「戦争における日本の加害の歴史」をテーマに

## 学生部会フィールドワークin長野(9/13〜15)開催 50人参加

反核医師の会学生部会は、昨年9月13〜15日に、長野県内で「学生部会フィールドワークin長野」を開催した。メインテーマは「戦争における日本の加害の歴史」とし、無言館、満蒙開拓平和記念資料館、「松代大本営」を巡り、駒ヶ根市では元731部隊少年隊員・清水英男氏からお話を伺ったので、概要を報告する。

### 学生部会FW報告

反核医師の会学生部会

佐賀大学1年 更屋 陽悠

今回の反核医師の会学生部会長野フィールドワーク(FW)では、3日間を通して非常に密度の高い学びを得ることができた。



というだけでなく、人権を侵され、意図しない加害に加担し、夢を奪われたという、今まで想像も

を学ぶほど、自分の無知に気づき、さらに多くの、まだ知らない歴史があるのだらうと考える

ようになっただけです。しかし同時に、そういった学びを得られたこと、今回のFWの大きな成果であり、また、これからの学びの大切な原動力であるとも考えています。

この3日間のFWを通して戦争という装置が「被害と加害を同時に生み出す」仕組みに目を向けることができたと思います。戦争と核兵器の被害を単なる過去の出来事として捉えるのではなく、そこに利用されていた貧困や憎悪の連鎖、倫理の崩壊といった過程に注意深く目を向けること。そして、何より今も残る傷を抱えた被害と加害の当事者の声に耳を傾けること。歴史修正主義や愛国を叫ぶ国のリーダーが誕生した今だからこそ、私たちに求められる

FW1日目は上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」を見学したのち、長野反核医療者の会より木下先生、河野先生、光武先生をお呼びし、医師と医学生によるクロストークを行いました。2日目には松代大本営跡地のなかへ実際に足を踏み入れ、約2時間にわたって当時の劣悪な作業環境や強制労働の実態を学んだ後、元731部隊少年兵であった清水英男さんに事前収録いただいたビデオによるご講演をいただきました。最終日は

きました。無言館では同世代の画学生達の凄惨な人生に言葉を失い、満蒙開拓平和記念館では戦争における加害と被害の二面性を痛烈に突き付けられました。

今回、様々な加害の歴史を学ぶ中で募っていたのは「何の意見も言えないのではないか」という思いです。FWでは、どのような加害の物語の裏にも、さまざまな事情があり、理由があったというところ、そして全ての

加害には、被害が同一のものとしてあるということ学びました。731部隊に参加した少年兵も、満蒙開拓団として中国人から土地を奪った農民や関東軍も、そして画学生でありながら派兵され太平洋の各地で戦病死した若者たちも、彼ら彼女らは、加害者であると同時に被害者でもありました。そしてその被害は、単に命が脅かされた

2025年度反核医師の会学生部会のFWを長野県で開催しました。今年度より設けた役職を含む新幹部体制のもと、本FWを学生が自らの意志で企画し、学び続ける組織づくりのための大きな足がかりと位置付け、年度当初よりFW開催に向けての議論を重ねてきました。そのテーマを横

に学ぼうとしないとなかなか触れられない現状があります。学び続け、現在においても被害を被っている人がいることに敏感でいること。そして人権を脅かす政策にNOと言っ勇氣を持つこと。今回の学びを自分の生活に落とし込み、歴史から得た教訓を語り継いでいく営みを支える確かな一人になりたいと思います。

FW1日目は上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」を見学したのち、長野反核医療者の会より木下先生、河野先生、光武先生をお呼びし、医師と医学生によるクロストークを行いました。2日目には松代大本営跡地のなかへ実際に足を踏み入れ、約2時間にわたって当時の劣悪な作業環境や強制労働の実態を学んだ後、元731部隊少年兵であった清水英男さんに事前収録いただいたビデオによるご講演をいただきました。最終日は

FW1日目は上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」を見学したのち、長野反核医療者の会より木下先生、河野先生、光武先生をお呼びし、医師と医学生によるクロストークを行いました。2日目には松代大本営跡地のなかへ実際に足を踏み入れ、約2時間にわたって当時の劣悪な作業環境や強制労働の実態を学んだ後、元731部隊少年兵であった清水英男さんに事前収録いただいたビデオによるご講演をいただきました。最終日は

### 参加者の感想

岡山大学5年 小金丸 悠太



ク。個人的に最も胸に残ったのは無言館でした。将来への希望を抱いていた自分と同世代の画学生たちが、戦争によって無惨にも選択肢や命そのものを奪われた現実。彼らの遺作を見ることは、単なる作品の鑑賞とは違ったものでした。

手紙や絵葉書など家族や恋人との体温を感じるやり取りから伝わる生々しい痛みが、戦争を抽象から現実へと引き寄せました。松代大本営や満蒙開拓平和記念館では、戦争を優先し人権を踏みにじる社会構造のリアルを見ることができました。外国からだまされ連れて来られた人びとを低賃金で酷使したり、教育の現場で教師が生徒を満州へ送り出したり。その暴力的

な構造への反省は、いまを生きる私たちが教訓とすべきものだと思いましたが、元731部隊少年兵の清水さんの人生についても学ばせていただきました。医療が倫理を失うとき「いのちを救う手」が「いのちを壊す手」に逆転し得ることを突きつけた教訓を語り継いでいく営みを支える確かな一人になりたいと思います。

な成果であり、また、これからの学びの大切な原動力であるとも考えています。この原動力を失わず、この先の様々な学びに向き合っていきたいと思います。

索していく中で、改めて戦争とはいったい何であったのか、そこに被害と加害を分けるものはあるのか、そして、再び戦争をする国づくりが進められようとしている今日、私たちはその実態を過去のものとしてではなく、一人一人の心と体に刻まれた今も終わらない傷として見つめられるかと自分たちに問うことにしました。

FW1日目は上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」を見学したのち、長野反核医療者の会より木下先生、河野先生、光武先生をお呼びし、医師と医学生によるクロストークを行いました。2日目には松代大本営跡地のなかへ実際に足を踏み入れ、約2時間にわたって当時の劣悪な作業環境や強制労働の実態を学んだ後、元731部隊少年兵であった清水英男さんに事前収録いただいたビデオによるご講演をいただきました。最終日は





## 「Don't Bank on the Bomb」特集



原水禁世界大会開会式で



国際会議で発言する松井和夫・和歌山協会理事（左端）



左からステイブン・リーパー氏、浅野英男氏、森俊英氏

## 近畿反核医師懇談会

## 被爆80年を核廃絶への節目に 広島で行動

第6回金融機関調査結果を報告  
核禁止条約「重視」78%  
「核兵器をなくす日本キャンペーン」も協力

近畿反核医師懇談会は重点的に取り組む「Don't Bank On the Bomb」（核兵器にお金を貸すな、DBOB）キャンペーンの一環として、8月4日、広島市内で「第6回核兵器製造企業への投融資に関する金融機関調査結果報告会」を実施。一般社団法人「核兵器をなくす日本キャンペーン」も協力し、同キャンペーン事務局の浅野英男氏、Peace Culture Village 代表のステイブン・リーパー氏、浄土宗僧侶の森俊英氏も同席、コメントした。

調査は全国の金融機関157社を対象にし、32社から回答（回答率20・4%）を得た。核兵器禁止条約を重視している」と回答した金融機関は78%で、これまでの調査より増加。また、核兵器製造「企業」への投融資を禁止するポリシーを持つと回答した金融機関が18%と、調査開始以来、過去最高となった。

当日の様子は、翌日、中国新聞としんぶん赤旗が報道した。

原水爆禁止世界大会・国際会議in広島でアピール  
世界中で「DBOB」広げよう

8月3日～6日に広島市内で開催された原水爆禁止世界大会でもDBOBキャンペーンのPR活動を実施。

3日には国際会議内で、松井和夫和歌山県保健医療協会理事がDBOB

## 特別企画「宗教と平和」〃人間とは何か〃

近畿反核医師懇談会は5月25日に特別企画として「宗教と平和」を大阪協会会議室とオンラインで開催。浄土宗僧侶でピースプラットホーム事務局の森俊英さんが講師を務め、近畿各府県から21人が参加した。

森氏は、核は使用されなくとも開発・保有する過程で多くの被爆者・被害者を生むこと、核拡散阻止の困難性を指摘し、核兵器廃絶に向けて市民

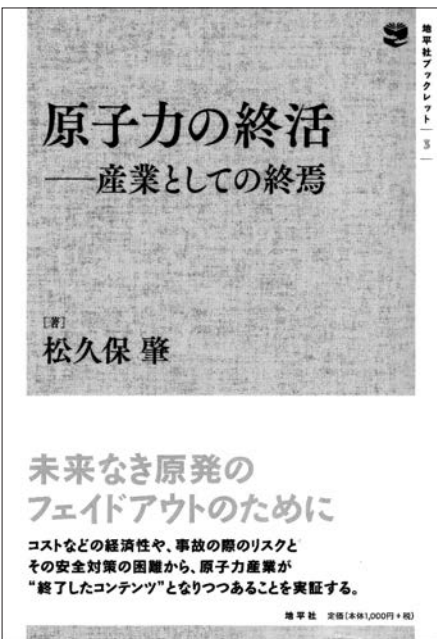
が声を上げていくことが必要であるとし、森氏自身も被爆者の方々のため活動・発言に動かされてきたとした。

そして、チンパンジーとの比較から人間の特徴は未来を想像できることにありとし、このため人間は容易に絶望する一方、逆に「希望」を持つことができるという分析。苦悩しながらも希望があるからこそ、人間は生きていくことができる」と言えると、宗教者としての経験もふまえて語った。

近畿反核医師懇談会が中心に取り組むDon't Bank On the Bombキャンペーンにも触れながら、医療者と宗教者が積極的に意見交換して、核廃絶に向けて協力しあっていると呼びかけた。

## 読書案内

松久保 肇 著

原子力の終活  
―産業としての終焉地平社ブックレット（定価1000円＋税）  
2025年9月発行

本書は原子力資料情報室の共同代表兼事務局長で、経産省の「原子力小委員会」委員を務める気鋭の研究者による単著である。福島事故の痛手を忘れたかのように再稼働に流される今、原発の将来を考えるうえで重要な視点を提供してくれる。

章立ては1…原子力の

経済性、2…気候危機と原発、3…核燃料サイクル問題、4…安全保障と原子力の4章である。どの章をとっても大部な書になりそうだが、ブックレットという小著ながらそれぞれの小著ながらそれぞれについて問題点を余すところなく整理している。

1章では原発再稼働が

電気代を下げるどころか上げってしまう理由を豊富な業界資料を使って簡明に説明し、騙されやすいメディアや国民への警告となっている。原発は運転していなくても膨大な維持費、ひいては国税を浪費し続けている。このような廃棄物を

含めて制御しきれない大量の放射性物質を扱わなければならない原発を維持する理由は一体何なのか、全ての政治家に問わなければならない。

2章では原発が脱炭素電源には不向きである理

由を説明している。河川から冷却水を得ている欧州の原発では、気候温暖化の影響もあって河川温の上昇で温排水が放出できず出力停止のリスクがある。また海水温が上がって海面上昇となれば海

に沈む原発もある。さらに3章の核燃料サイクル問題では、非核兵器保有国で唯一建設が許されている六ヶ所核燃料工場があるが、すでに過剰となった使い道のないプルトニウムを抱えており稼働させる大義はなく、むしろ国際的にはわが国の核武装懸念の源である。実は非核兵器保有国に原子力の平和利用を認めるNPT条項が核廃絶を妨げており、毒素条項だという著者の指摘は正鵠を得ている。4章については原発がエネルギー元

歴代政権の認識には根拠がないことを説明しているが詳細はお読みいただきたい。

なお、本書では福島第一原発事故や廃炉、廃棄物処理に関する経済的、環境的負担について触れていないが、それを入れてなくても原発産業は「終焉」せざるを得ないのである。もちろん次の事故が起る前に早く店じまいする以外に「終活」はあり得ない。

（反核医師の会・原発プロジェクト責任者 間間元）

## 会費納入のおねがい

(2025年4月1日～2026年3月末)

反核医師の会は、会員みなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。

2025年度（2025年4月1日～2026年3月31日）の会費納入のほど、よろしくお願いします。

個人会員（医師・歯科医師、医学者） 10,000円  
専攻医 5,000円  
研修医（卒後2年まで） 3,000円  
医・歯学生会員 1,000円  
賛助会員 1,000円

## 振込先

◇りそな銀行 新都心営業部 普通 1557502

「反核医師・医学者の集い」

◇ゆうちょ銀行（他銀行からの振り込みの場合）

〇一九支店 当座 0056764「反核医師・医学者の集い」

◇郵便振替00170-7-56764「反核医師・医学者の集い」

## 2026年反核医師のつどい 開催について

日 時：2026年10月31日（土） 11月1日（日）

開催場所：愛知県名古屋市 ウィンクあいち

詳細は次号でお知らせ